

高校生の対人関係形成に影響する要因の検討 : デートDV (Dating Violence) の潜在性との関連 (報告)

| | |
|-----|---|
| 著者 | 鈴木 ひとみ, 畑下 博世, 川井 八重, 福井 香代子, 植村 直子, 笠松 隆洋 |
| 雑誌名 | 滋賀医科大学看護学ジャーナル |
| 巻 | 7 |
| 号 | 1 |
| ページ | 51-56 |
| 発行年 | 2009-03-15 |
| URL | http://hdl.handle.net/10422/161 |

報告

高校生の対人関係形成に影響する要因の検討

—デートDV (Dating Violence) の潜在性との関連—

鈴木ひとみ¹ 畑下博世² 川井八重³ 福井香代子⁴ 植村直子² 笠松隆洋⁵¹神戸常盤大学保健科学部看護学科 ²滋賀医科大学医学部看護学科地域生活看護学講座³福山平成大学看護学部看護学科 ⁴滋賀医科大学医学部附属病院看護部 ⁵神戸市看護大学

要旨

思春期の若者が他者との程度対等な関係を育むことができているかを検証し、同性または異性との関係形成に影響する要因を明らかにする目的で研究を行なった。平成18年10月～19年6月に調査協力の意思を表明した高等学校1～3年生680人を対象に、対象学校の性教育プログラムの一環として質問紙調査を実施した結果、有効回答は409人であった。平均年齢17.0±0.7歳、男子243人(59.4%)、女子166人(40.6%)、恋人ありは25.7%で、交際期間の平均は11.0ヶ月であり、お互い大切に理解しあっていると認識していた。アイデンティティ尺度の平均得点は26.2点、PBIの平均得点はcare項目が38.1点、over-protection項目が26.6点であった。統計的検定の結果、アイデンティティが低い、または親の養育態度から情愛や共感を感じられず自分をコントロールされたと捉えている者は、他者(異性)との対等な関係を築きにくい傾向が認められた。このことから、早期から対等な関係性の重要性、自己の関係形成を学習できるようにする働きかけ、デートDVの潜在性を察知し予防的な取り組みを進めることが求められる。

キーワード: 高校生、対人関係、デートDV

はじめに

近年、若者の人工妊娠中絶、性感染症、薬物などによる健康問題が注目され、国の政策である「健やか親子21」でも解決すべき課題として掲げられている。そして、こうした現象の背景要因の1つとして、デートDV(Dating Violence)が潜在していることが考えられる。デートDVとは、思春期の高校生や大学生がデート相手にとる暴力的な態度や行動をいう¹⁾。アメリカではすでにデートDV防止プログラムが実施されているが、日本ではこの言葉すらあまり知られていないのが現状で、どれだけの被害実態があるのか全く不明である。2007年に内閣府男女共同参画局が「地域における女性に対する暴力の予防啓発に関する調査研究」として横浜市で行なった「デートDVについての意識・実態調査」では、高校生・大学生922人の中でデートDVという言葉を知っているのは20.4%であった。しかし、デートDV予防啓発プログラムを受けたあとに被害経験について尋ねると、交際経験のある女性のうち38.8%が何らかの被害を受けたことがあると回答していた。さらに、デートDVの行為(「たたく、ける、物をなげつける」、「バカにしたり傷つく言葉を言う、大声でどなる」、「メールのチェックや友達づきあいを制限する」、「性的な行為を無理やりする」、「デートの費用やお金を無理やり出させる」)を周囲の人でいずれかひとつでも見聞きしたことがあるものは、およそ半数に達している²⁾。デートDVは力のある者が力のない者を支配する関係、

つまり対等でない男女関係において発生する1つの事象である。本研究でその基盤ともなる思春期の他者との関係性を検証することで、一方が他方をコントロールしようとするデートDVの発生リスクをクローズアップさせ、対策をたてていく一助となる。そのことがデートDVによる身体的、精神的な健康問題の解決につながるだけでなく、若者に発生している性や各種依存症などの健康問題解決に繋がると考える。

1. 研究目的

本研究は、思春期の若者が他者との関係において、どの程度対等な関係を育むことができているかを検証するとともに、同性または異性との関係形成に影響する要因についても明らかにすることを目的とする。このことを、婚姻関係にない若者同士の間での暴力として、近年注目されているデートDVと関連させ考察する。

2. 研究方法

1) 対象

調査内容の主旨を理解して協力の意思を表明した高等学校1～3年生680人を対象とした。

2) データ収集方法

対象機関の学校で実施されている性教育プログラム(養護教諭による「保健」授業デートDVについて)の一環として自己記入式質問紙を用いて行った。

3) 調査時期

平成18年10月～19年6月に実施した。

4) 調査項目

基本的属性、友人や恋人の有無、デートの経験、恋人との関係、アイデンティティ尺度、共依存の傾向の有無、ジェンダーの考え方、PBI (Parental Bonding Instrument 日本語版尺度) について調査した。

(1) アイデンティティ尺度

アイデンティティ尺度³⁾は日本の大学生の「モラトリアム心理」とアイデンティティの確立度との関連を検討するために、東京大学の下山が開発したものである。「アイデンティティの確立」10項目と「アイデンティティの基礎」10項目からなっており、4段階で尋ね、合計点を算出する。それぞれ独立して使用することも認められている。本研究では「アイデンティティの確立」10項目を採用した。

(2) PBI

PBI は子どもからみた親の養育態度の自覚的評価スケールであり、Parker, Gが開発したものを小川が日本語版に訳し、信頼性、妥当性を検証している⁴⁾。

「care 愛情・共感」13項目、「over-protection 過保護・過干渉・統制」12項目からなり、それぞれに逆転項目を含み、合計点数で評価する。

5) データ分析方法

統計パッケージソフトSPSS 15.0J for Windowsを用いて統計処理し、分析を行った。記述統計の他に、データを男女で層化し、アイデンティティ尺度とPBIを中央値で高値群と低値群に分けたものと共依存傾向の有無、ジェンダーの考え方の項目との関連を χ^2 検定で検討した。

6) 倫理的配慮

調査対象機関に研究目的、方法を文書と口頭で説明し、考えうる問題点を協議し申し合わせ書を取り交わして調査を実施した。あくまでも高等学校の授業の一環であることを確認し、調査方法を検討した。対象生徒に研究目的、方法、倫理的配慮を研究者が文書と口頭で説明し、研究の参加が成績に一切関与しないことを保証した。質問紙と同時に封筒を配布し、回答・無回答に関わらず回答者が封入し提出した。また研究参加の有無に関する個々の状況が所属の学校に判明できないよう配慮した。対象者が未成年であるため、保護者への説明、対応は所属の学校が行った。

なお、本研究は滋賀医科大学倫理委員会の承認を受けて実施した。

3. 結果

配布数680人に対し、回収数672人(回収率98.8%)で、有効回答数は409人(有効回答率60.1%)であった。

1) 基本的属性

平均年齢17.0±0.7歳、男子243人(59.4%)、女子166人(40.6%)で、8割以上が3年生であった。同居の家族は父が370人(90.5%)、母が394人(96.3%)、兄、姉、弟がそれぞれ3割前後で、核家族傾向にある。祖母とは94人(23.0%)が、祖父とは47人(11.5%)が同居していた。同性の友人ありが331人(80.9%)に対し、異性の友人は196人(47.9%)がいると答え、恋人ありは105人(25.7%)であった。交際期間の平均は11.0ヶ月であった。相談相手は友人が317人(77.5%)で最も多く、次いで両親が126人(30.8%)、以下クラブの仲間、恋人、きょうだいの順であった。デートの経験は7割近くがあるものの特定のデート相手は272人(66.6%)がいないと答えていた(表1)。

表1 対象者の属性(n=409)

| | | | | | |
|--------|---------|-----------|--------|--------|-----------|
| 年齢 | 平均 | 17.0 | 同居の家族 | 父 | 370(90.5) |
| | S D | 0.7 | (複数回答) | 母 | 394(96.3) |
| | 最小-最大 | 15-19 | | 義父 | 5(1.2) |
| | 中央値 | 17.0 | | 義母 | 5(1.2) |
| 性別 | 男性 | 243(59.4) | | 兄 | 132(32.3) |
| | 女性 | 166(40.6) | | 姉 | 106(25.9) |
| 学年 | 1年 | 25(6.1) | | 弟 | 112(27.4) |
| | 2年 | 33(8.1) | | 妹 | 77(18.8) |
| | 3年 | 350(85.6) | | 祖父 | 47(11.5) |
| | 無回答 | 1(0.2) | | 祖母 | 94(23.0) |
| 異性の友人 | いる | 196(47.9) | | 配偶者 | 1(0.2) |
| | いないのほしい | 67(16.4) | | 恋人 | 6(1.5) |
| | 不要 | 135(33.0) | | 友人 | 15(3.7) |
| | 無回答 | 11(2.7) | | その他 | 13(3.2) |
| 同性の友人 | いる | 331(80.9) | 相談者 | 友人 | 317(77.5) |
| | いないのほしい | 30(7.3) | (複数回答) | 両親 | 126(30.8) |
| | 不要 | 42(10.3) | | きょうだい | 41(10.0) |
| | 無回答 | 6(1.5) | | 教師 | 20(4.9) |
| 恋人 | いる | 105(25.7) | | 恋人 | 50(12.2) |
| | 今はいない | 173(42.3) | | クラブの仲間 | 72(17.6) |
| | 今までない | 116(28.3) | | メル友達 | 16(3.9) |
| | 無回答 | 15(3.7) | | その他 | 24(5.9) |
| デートの経験 | あり | 284(69.4) | デート相手 | 1人いる | 104(25.4) |
| | なし | 115(28.2) | | 複数いる | 19(4.6) |
| | 無回答 | 10(2.4) | | いない | 272(66.6) |
| | | | | 無回答 | 14(3.4) |

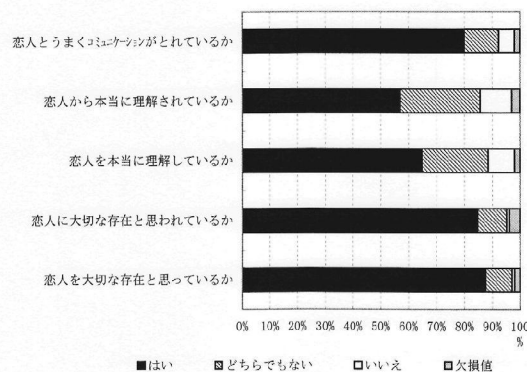


図1 恋人との関係性の評価 (n=105)

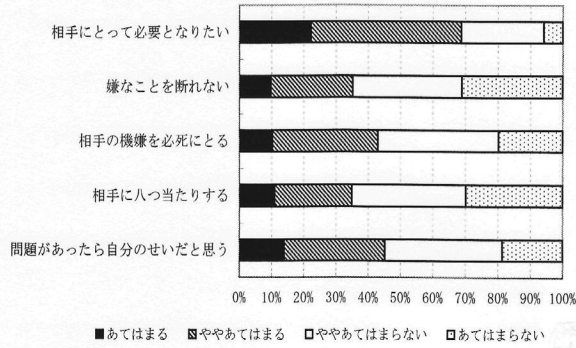


図2 共依存傾向の有無 (n=409)

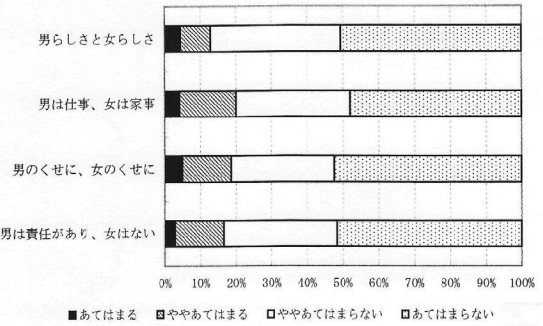


図3 ジェンダーに対する考え方 (n=409)

表2 アイデンティティ尺度とPBIの得点 (n=409)

| | 平均 | S D | 範囲 | 中央値 | 高値群 | 低値群 |
|-------------------|------|-----|-------|------|------------|------------|
| アイデンティティ尺度 | 26.2 | 5.5 | 10-40 | 26.0 | 190 (46.5) | 219 (53.5) |
| P B I | | | | | | |
| care項目 | 38.1 | 6.4 | 14-52 | 38.0 | 189 (46.2) | 220 (53.8) |
| over-protection項目 | 26.6 | 4.6 | 15-43 | 27.0 | 174 (42.5) | 235 (57.5) |

※高値群、低値群は中央値より上位、下位の得点で分類した(度数(%))

恋人がいると回答した者の恋人との関係性をどう感じているかを図1に示した。8割以上が互いに大切な存在と思っているが、互いを理解しているかについては6割前後の肯定的回答にとどまっている。しかし8割の者がコミュニケーションはとれていると答えており、全体的な関係性は良いように感じられるが、十分に理解し合っているかは確信していないようであった。

2) 他者との関係性に影響する要因

共依存傾向の有無は、西尾による共依存者の行動パターン⁵⁾を参考に質問項目を挙げた。5割以上の肯定的回答を示したのは「普段から自分の行動が相手にとって必要となることを期待している」という項目のみで、「自分が嫌なことを『できない』と言えない」、「相手の機嫌を必死にとることがある」、「相手に八つ当たりしてしまう」、「問題があったときに『全

部自分のせいだ』と思う」については4割前後の者が肯定的回答をしていた(図2)。

ジェンダーの考え方についての回答結果を図3に示した。「男らしさとは『泣かなくて強い』こと、女らしさとは『か弱くてやさしい』ことだと思う」、「男性は外で働き、女性は家事や育児をするものだと思う」、「あなたは『女のくせに』とか『男のくせに』とか言う」、「男性は何事にも責任を求められ、女性は求められないと思う」について、「あてはまる」、「ややあてはまる」の肯定的回答は、いずれも2割以下であった。ジェンダーについて固定的な意識は持っていないという傾向がみられた。

アイデンティティ尺度の平均は26.2点であった。これは高いほど自己の主体性や自己への信頼が形成されていることを示し、40点満点である³⁾。一方、PBIの

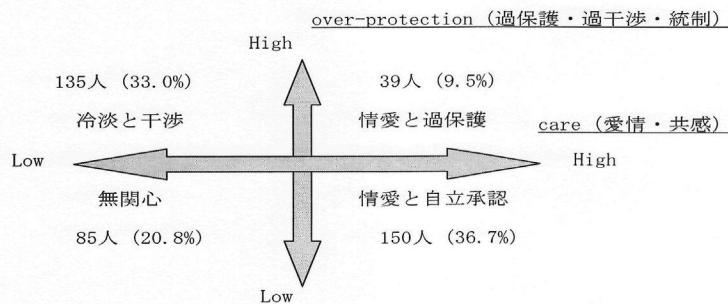


図4 PBIタイプ分類 (n=409)

平均点はcare項目38.1点、over-protection項目26.6点であった。PBIのcare12項目は、愛着、暖かさ、共感、親密さなど（逆の意味で無関心、拒否）を評価し、点数が高いほど保護度が高いことを表す（範囲：13-52点）。over-protection13項目では、操縦、進入、過剰接触、幼児扱い、自立的行動の妨害など（逆の意味で自主、独立を促すこと）の度合いを評価しており、点数が高いほど過保護を表し、低いほど自立の奨励を表している（範囲：12-48点）。

図4に示したPBIタイプ別分類は、鈴木らによる分析方法⁷⁾を参考にした。care項目とover-protection項目の両方が高い「情愛と過保護」に分類されるのは、39人(9.5%)であった。care項目が高くover-protection項目が低い「情愛と自立承認」に分類されるのは150人(36.7%)であった。care項目が低くover-protection項目が高い「冷淡と干渉」に分類されるのは135人(33.0%)であった。care項目、over-protection項目共に低い「無関心」に分類されるのは85人(20.8%)であった。

次に、アイデンティティ尺度得点の中央値で高値群と低値群に分け、共依存傾向の有無とジェンダーの考え方の項目との関連について検討を行い、その結果を表3に示した。男女ともアイデンティティ得点の高い者では、「普段から自分の行動が相手にとって必要となることを期待している」ことを肯定している者が多い（男子p<0.01、女子p<0.05）。また、アイデンティティ得点の高い男子では、「自分が嫌なことを断

われない」、「相手に八つ当たりしてしまう」については、それらのことを否定する傾向にある者が多く（p<0.05）、アイデンティティ得点の高い女子においても、「相手に八つ当たりしてしまう」ことを否定する傾向にある者が多かった（p<0.05）。

同様に、PBIについても共依存傾向の有無とジェンダーの考え方との関連について検討を行った。care項目得点が高い男子ほど「普段から自分の行動が相手にとって必要となることを期待している」ことを肯定する者が多い（p<0.01）。一方、care項目得点が高い男子では、「相手の機嫌を必死にとることがある」という行動を否定する者が多かった（p<0.05）。over-protection項目では、得点の低い男子が「相手の機嫌を必死にとることがある」および「相手に八つ当たりしてしまう」行動を否定する者が多い傾向にあった（いずれもp<0.05）。女子でも、over-protection項目得点が高い者が「相手の機嫌を必死にとることがある」という行動を否定する傾向があり（p<0.05）、「問題があったときに『全部自分のせいだ』と思う」という行動についても否定の回答をする傾向があった（p<0.05）。

なお、いずれの項目も、ジェンダーの考え方との間に有意の関連はみられなかった。

4. 考察

本調査の対象者は高校3年生が多かったが、まだ異性よりも同性の友人が多く、相談相手にも友人や両親を選

表3 アイデンティティ尺度、PBI得点と共依存の傾向との関連

| | | | アイデンティティ尺度 | | PBI:care | | PBI:over - protection | | | |
|------------------|----|-----|------------|-----------|----------|-----------|-----------------------|-----|-----------|------------|
| | | | 高値群 | 低値群 | 高値群 | 低値群 | 高値群 | 低値群 | | |
| 相手にとって必要となりたい | 男子 | 肯定群 | 88 (36.2) | 72 (29.6) | ** | 82 (33.7) | 78 (32.1) | ** | 64 (26.3) | 96 (39.5) |
| | | 否定群 | 28 (11.6) | 55 (22.6) | | 22 (9.1) | 61 (25.1) | | 42 (17.3) | 41 (16.9) |
| | 女子 | 肯定群 | 61 (36.8) | 60 (36.1) | * | 62 (37.3) | 59 (35.5) | | 54 (32.5) | 67 (40.4) |
| | | 否定群 | 13 (7.8) | 32 (19.3) | | 23 (13.9) | 22 (13.3) | | 14 (8.4) | 31 (18.7) |
| 嫌なことを断れない | 男子 | 肯定群 | 39 (16.0) | 46 (18.9) | * | 34 (14.0) | 51 (21.0) | | 37 (15.2) | 48 (19.8) |
| | | 否定群 | 77 (31.8) | 81 (33.3) | | 70 (28.8) | 88 (36.2) | | 69 (28.4) | 89 (36.6) |
| | 女子 | 肯定群 | 24 (14.5) | 35 (21.1) | | 29 (17.5) | 30 (18.1) | | 24 (14.4) | 35 (21.1) |
| | | 否定群 | 50 (30.1) | 57 (34.3) | | 56 (33.7) | 51 (30.7) | | 44 (26.5) | 63 (38.0) |
| 相手の機嫌を必死にとる | 男子 | 肯定群 | 49 (20.2) | 56 (23.0) | | 52 (21.4) | 53 (21.8) | * | 48 (19.8) | 57 (23.4) |
| | | 否定群 | 67 (27.6) | 71 (29.2) | | 52 (21.4) | 86 (35.4) | | 58 (23.9) | 80 (32.9) |
| | 女子 | 肯定群 | 26 (15.6) | 45 (27.1) | | 37 (22.3) | 34 (20.5) | | 36 (21.7) | 35 (21.1) |
| | | 否定群 | 48 (29.0) | 47 (28.3) | | 48 (28.9) | 47 (28.3) | | 32 (19.2) | 63 (38.0) |
| 相手に八つ当たりする | 男子 | 肯定群 | 34 (14.0) | 33 (13.6) | * | 28 (11.5) | 39 (16.0) | | 34 (14.0) | 33 (13.6) |
| | | 否定群 | 82 (33.7) | 94 (38.7) | | 76 (31.3) | 100 (41.2) | | 72 (29.7) | 104 (42.8) |
| | 女子 | 肯定群 | 27 (16.2) | 49 (29.5) | * | 37 (22.3) | 39 (23.5) | | 33 (19.9) | 43 (25.9) |
| | | 否定群 | 47 (28.4) | 43 (25.9) | | 48 (28.9) | 42 (25.3) | | 35 (21.1) | 55 (33.1) |
| 問題があったら自分のせいだと思う | 男子 | 肯定群 | 54 (22.2) | 54 (22.2) | | 47 (19.3) | 61 (25.1) | | 50 (20.6) | 58 (23.9) |
| | | 否定群 | 62 (25.5) | 73 (30.1) | | 57 (23.5) | 78 (32.1) | | 55 (22.6) | 80 (32.9) |
| | 女子 | 肯定群 | 30 (18.1) | 47 (28.3) | | 39 (23.5) | 38 (22.9) | | 35 (21.1) | 43 (25.9) |
| | | 否定群 | 44 (26.5) | 45 (27.1) | | 46 (27.7) | 43 (25.9) | | 35 (21.1) | 56 (33.7) |

※男子n=243, 女子n=166

* p<0.05, ** p<0.01

んでおり、特定の相手や恋人と呼べる存在がいるのは少数であった。思春期の対人関係の特徴は、友人の選択がこれまでの外的基準から内面的になっていき、親友ができ、やがて親—大人に対する全面的な信頼が崩れ、大人の支配下から脱し親から離れたい欲求、自分の世界を自分で作りたい欲求を強め新たな関係を求めるようになる。受動的な与えられた関係ではなく、自ら能動的に形成する、対等で主体的な対人関係を求め、友人、異性の友へと依存の対象を変えていく⁷⁾。このような発達の見点で見ると、本研究の対象者はまだ思春期の対人関係形成途上にあり、異性との親密な関係を築くにはいまだ至っていない段階であるといえる。その中でも、恋人がいると回答した者の恋人との関係性は概ね良好であった。しかし、お互い大切にコミュニケーションがとれていると評価しながらも、理解については十分でない様子であり、相手の内面に迫るような親密さを持っていないようである。これらの状況から、今回研究対象とした高校生では、対人関係を形成する能力も未熟で、異性との交際において対等で親密な関係を築くには課題のある状態だと考えられる。

思春期の親密性の獲得には、アイデンティティの確立がまず求められる。それを基盤に、他者と自己を分かち合うことを経験する。今回、アイデンティティ尺度やPBIの得点では、とくに偏りのある集団ではないことがわかる。アイデンティティ得点が高い男子および女子が相手から必要とされたいと回答しているのは、発達課題の達成に向けて持っている欲求であると考えられる。しかし、アイデンティティの確立が低い女子に「相手に八つ当たりしてしまう」傾向があった。自己の主体性や自己への信頼の形成が確立していないと、共依存の傾向が潜在する可能性がある。しかし、全体的にアイデンティティ尺度では共依存の傾向との関連性は薄かった。

一方、親の養育態度には共依存の傾向を示す回答に影響があった。親からの情愛や共感を得たとし、過保護であったり干渉されたとは捉えていない者が共依存の傾向を示す回答を否定している。しかしこのことは、今後成長とともに親密な異性との関係を構築する思春期の学生が、自立性や自己への信頼が低い、または親の養育態度から情愛や共感を感じられず、自分をコントロールされたと捉えていると、他者と対等な関係を築きにくい傾向を持つおそれがあることを示唆する。

デートDVは男女が親密な関係を持った際、一方が他方をパワーとコントロールで支配するときが発生する。そして、婚姻する前からこの状況は見られている。その背景要因の1つに、共依存という特性が指摘されている。共依存とは自己喪失の病、あるいは他者の必要や行動に焦点づけられる結果として起こる機能不全であり、自らの存在論的安定のために、自己の欲求を定義してくれる

人を必要とする人のことである⁸⁾。共依存者の特徴は、自分のことより他人の問題に夢中になり、他人にとるべき責任をとらせないで、自分で他人のコントロールをしようとする。他人の問題に振り回されて自分を見失ってしまう特殊な人間関係を作り上げる⁵⁾。これは対等な関係とは対極にある状況で、デートDVという現象にあてはめて考えれば、相手をパワーで支配する加害者であり、また被害を受けながらもその歪んだ関係に固執し支配とコントロールの関係を支えてしまうという両者の素養がみえる。共依存者の育つ家庭は、程度の差こそあれ、アルコール依存や虐待、DVなどが存在する機能不全家庭である。そして機能不全家庭で育った人は、機能的な人間関係を知らず、何が健全なコミュニケーションなのか健全な行動なのかわからない故に、大人になっても自己の不安感・自己評価の低さから共依存的な行動や人間関係に陥りやすい⁹⁾。今回の調査で共依存傾向の有無だけを見ると特徴がなかったが、アイデンティティやPBIの得点との関連があった。このことから、本人が意識していなくても、家庭環境や親との関係、受けてきた養育に対する自覚、自立性や主体性の有無などから対人関係を形成する力を評価でき、対等な関係性を構築できないような特性を持つ人へのアプローチを始める手がかりにできると思われる。親との関係から脱し、他者との親密な関係を構築していく思春期に、性教育の中でできるだけ早期から対等な関係性の重要性を学習でき、自分が他者(異性)とどのような関係形成の特性を持つのかを検討できるような機会を設け、デートDVの潜在性を察知し予防的な取り組みを進めることが求められる。

5. 結論

平成18年10月～19年6月に調査内容の主旨を理解して協力の意思を表明した高等学校1～3年生680人を対象に、対象学校で実施されている性教育プログラムの一環として質問紙調査を実施した結果、409人から有効回答を得た。

対象者は平均年齢17.0±0.7歳、男性59.4%、女性40.6%で、8割以上が3年生であった。同居の家族は父が90.5%、母が96.3%、兄、姉、弟がそれぞれ3割前後で、核家族傾向にあった。異性よりも同性の友人が多く、相談相手にも友人や両親を選んでおり、特定の相手や恋人と呼べる存在がいるのは少数であった。共依存傾向の有無は、相手にとって必要とされたいという回答が5割以上であった他は4割前後の肯定的回答にとどまり、ジェンダーについては固定的な意識は見られなかった。アイデンティティ尺度やPBIの得点では、とくに偏りのある集団ではなかった。アイデンティティ得点が高い男子および女子が相手から必要とされたいと回答しており、また自立性や自己への信頼が低い、または親の養育態度から情愛や

共感を感じられず、自分をコントロールされたと捉えている者は、他者と対等な関係を築きにくい傾向を持つと考えられる。高校の性教育の中で、できるだけ早期から対等な関係性の重要性を学習でき、自分が他者（異性）とどのような関係形成の特性を持つのかを検討できるような機会を設け、デートDVの潜在性を察知し予防的な取り組みを進めることが求められる。

おわりに

今や養護教諭や心理カウンセラーにはデートDVという用語は周知されている。しかし、看護の分野であっても認識はまだ浅く、ようやくこの1～2年になってデートDVをキーワードとする研究がみられるようになってきたのが現状である。本調査は高校の性教育の一環として実施したため、この内容に関して研究対象機関の教職員や養護教諭の方々と何度も話し合いを重ねた。その中で、高校の教育現場では調査報告としてまとまってはいないものの、予想以上にデートDVに相当する現象が目撃されており、デートDVに対する予防的取り組みが必要になっていることが実感できた。本調査の結果を始め、多くの研究成果が高校教育に還元されることが待たれている。現在NPOによるデートDVについての知識を普及する活動が行われているが、我々看護職もデートDVへの認識を高め、協働して活動をすすめていかなければならない。

謝辞

本研究にご協力いただいた高等学校の生徒の皆様、教職員の皆様、養護教諭の方々に深謝致します。

なお、本研究の一部は第67回日本公衆衛生学会総会(2008.11)で発表した。

引用文献

- 1) 山口のり子：デートD防止プログラム実施者向けワークブック。梨の木社, 2003.
- 2) 横浜市市民活力推進局：デートDVについての意識・実態調査報告書。2008.
- 3) 下山晴彦：アイデンティティ尺度, 山本真理子, 堀洋道 編：心理測定尺度集1. p91-94, 2001.
- 4) 小川雅美：PBI (Parental Bonding Instrument) 日本語版の信頼性、妥当性に関する研究. 精神科治療学, 6(10), pp1193-1201, 1991.
- 5) 西尾和美：共依存症の精神療法. 斉藤学：こころの科学セレクション 依存と虐待. 日本評論社, p61-76, 1999.
- 6) 鈴木祐子 他：男女別による子ども虐待の認識と世代間伝達の関連, 日本赤十字武蔵野短期大学紀要, 15, 25-30, 2002.
- 7) 無藤隆志、高橋恵子、田島信元 編：発達心理学 入門Ⅱ—青年・成人・老人、東京大学出版会、1990.
- 8) 小此木啓吾、深津千賀子、大野裕：心の臨床家のための必携 精神医学ハンドブック、創元社、1998.
- 9) 斉藤学：「自分のために生きていける」ということ、大和書房、2004.